

# 聖と丘

第46号  
2024・6・9発行  
金光教教学研究

これが戦争なのか…

第二部部长 高橋昌之



教学研究所では普段、常勤の職員と研究生に加え、評議員、嘱託、研究員をはじめとする所外の先生方にご

協力頂きながら、研究業務を進めています。また、教内外からの問い合わせや研究者の来訪なども、研究を進める上で大きな刺激となっております。

米国プリンストン大学の大学院博士課程で学ぶ、ヘザー・文子・ハインバックさんはそうした来訪者の一人です。彼女は現在、金光教を信仰する人々が先の戦争でいかなる経験をし、戦後どのように生きてきたのか、といったことについて研究しています。

彼女が金光教について知ったのは、大学生になつてからとのこと。以前留学していた同志社

大学の先生から、金光教についての英語の研究がないので、金光教の信者にインタビューして論文を書いてはどうかとアドバイスされたのがきっかけだそうです。そこでホームステイ先の近くにあった教会に参拝したところ先生が原爆被爆者で、被爆してご苦労された事を「神様のおかげ」と前向きに捉える様子に、大きな感銘を受けたといえます。

そのヘザーさんが、一昨年に続いて昨年の夏に本所を訪れ、数日間にわたり資料の閲覧や懇談などを行いました。大学入学後に学び始めたという日本語は流ちょうです。私自身が原爆に関する研究をしていたので、思い当たる文献や資料を紹介しましたが、戦災体験者へのインタビューも行いたいという彼女の希望で、私の父から話を聞く事になりました。

七月下旬の日曜日、月例祭にあわせて彼女を教会に案内すると、子供時代に岡山空襲で被災した信者さんも協力を申し出て下さいました。

終戦時に小学二年生だったというその男性は、真夜中に始まった空襲で自宅（理髪店）を焼け出され、焼夷弾が降り注ぐ下を母親と姉の三人で逃げたそうです。そうした中、近所の公会堂に避難しようとしたのですが既に満員で、仕方なく外に座っていたところ、その公会堂を爆弾が直撃して大勢の人が亡くなった時の恐怖も語ってくれました。また戦後は母親が三代金光

様の取次を受け、出征した父親が復員するまでバリカン一つで家業を切り盛りし、自分たち姉を育ててくれた実際などが「神様の御蔭」として明かされました。八十年ちかく前の出来事がまるで昨日の事のように語られ、私もヘザーさんと一緒に引き込まれながら聞かせてもらったようなことです。

次に、昼食をはさんで私の父へのインタビューが始まりました。父は岡東教会に育ち、小学四年生で終戦を迎えました。岡東教会は市内中心部から旭川を隔てて東側にあり、空襲時には裏に焼夷弾が落ちたものの焼失を免れました。この点、自宅を焼かれた先の信者さんとはまず大きな違いがあります。ヘザーさんから戦中・戦後の思い出について質問された父は、空襲の時にあわてて避難した様子や、炎上する岡山城を見た時の恐ろしさをポツポツ話し出し、「とにかく明けても暮れてもお腹がへって苦しかったですねえ。それに比べると今は天国です」と続けました。

その後も、当時の教会や信者さん達の様子、学校生活の変化、天皇への思いなど、彼女から次々と質問されましたが、父には余りハッキリした記憶が無いようで、口から出るのは「とにかくお腹がへって苦しかった」という思いのみでした。延々と続く同じ様なやりとりを見ながら、私は苦笑するしかありません。それでも

インタビューを終えたヘザーさんは「色々な人に話を聴けて良かったです」と言ってくれました。私は「記憶が薄れてきた父に、子供時代のことを聞くのはやはり難しかったか」「でも信者さんから詳しい話を聞けてよかった」などと考へながら、彼女の研究成果を祈るばかりでした。

それから忙しい日々を送る中で、私の頭からこの時のことは次第に離れていきました。ところがそんなある日のこと、一緒に食事をしていた父が何を食べても「美味しいなあ」と連発する姿を見て、ふと「これが父の戦争だったのか」と腑に落ちた気がしたのです。

：九十近い年齢を重ねて細かな記憶はどんどん消えていく中、幼い身体に刻み込まれた空腹感だけは、決して過去のものとなっていない。むしろ現在の生活が豊かであればあるほど、かつて味わったひもじさや苦しさを、影の如くよみがえらせ続けているのが戦争ではないか。テレビで戦争の映像を見るたびに「ああかわいそうに」「指導者は何で戦争を始めたんかなあ」と本気で怒るのも、父の戦争がまだ終わっていない証ではないか。それはきつと先の信者さんにも言えることで、だからこそ当時の生々しい状況が口について出たのかも知れない…。

遠くアメリカから訪れたヘザーさんの問いかけを通じて、父や信者さんが経験した／今も経験している戦争の一端が、少しずつ私の眼前に

浮かび上がってきました。とりわけ父の話は以前に何度も聞いていたはずでしたが、彼女との応答を繰り返す姿そのものが、今の私にとって追究すべき、戦争と信心の問題として迫っています。

私の祖父母世代は、教祖の教えを掲げて敵国と戦いました。国家の要請に逆らえなかったとは言え、信心の真価を賭けて戦ったのは事実なのです。では、今この時も血なまぐさい戦いが終わらない世界に、私たちは信心させてもらおう者としてどう向き合うべきなのか？ 容易に答えの見つからない問いが、私たちへ突きつけられているように思います。

教学は研究所内だけで行われるものではなく、まして研究者個人の営みにおいて完結するようなものでもありません。だからこそ、様々にもたらされる出会いを大切に、世界に向けて本当に考えるべき問題を示すことが出来るよう、着実な歩みを進めたいと願われます。

(岡山・岡山教会)



## ◆令和六年度の計画◆

本所設立七〇周年を迎える本年度は、研究生一名を加え、所長以下総勢一四名でのスタートとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

### 紀要論文講読セミナー

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】各日一三・〇〇～一四・三〇

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識した取り組みです。

本年は、次の四本の論考を取り上げます。参加希望の場合は事前にご連絡下さい。

なお、開講日・内容などが変更となった場合には、金光新聞や金光教本部及び本所ホームページなどを通じて随時ご案内いたします。

〈実施済み〉

【第一回】五月一〇日(金) 担当・橋本雄二

畑愷「金光教典の成立過程について」

(第四号)

〈予定〉

**第二回** 七月一日(水) 担当・塩飽望

森川眞知子「後家としての神―一子大神の生と死―」 (第二〇号)

**第三回** 九月一〇日(火) 担当・堀江道広

早川公明「『覚書』『覚帳』の執筆当初における視点の相違について」(第一九号)

**第四回** 一一月一〇日(金) 担当・森定展開

小関照雄「『広前歳書帳』(教祖御祈念帳)について」 (第二七号)

**第六三回教学研究会** (予定)

**【場所】** 金光北ウイングやつなみホール

**【日時】** 六月二一日(金)

昨年同様、本年も来場参加とオンライン参加を併用する形で開催します。内容は、個別の研究発表と全体会を予定しています。全体会では、「神と人の〈あわい〉」をテーマに、嘱託土居浩氏(へのつくり大学教授)による講演に続いて、所内外からのコメント・全体討議を行います。

**第二五回教学講演会** (予定)

**【場所】** 金光北ウイング光風館研修室

**【日時】** 九月二八日(土) 夕刻

生神金光大神大祭第一日の前夜に、紀要第六四号の研究成果を題材にした教学講演会を開催する予定です。

**第一八回教学に関する交流集会** (予定)

**【場所】** 本部総合庁舎一階展示室

**【日時】** 一一月一五日(金)

信奉者との討議や意見交換を通じた、相互の問題関心の醸成を願うための取り組みです。

昨年に引き続き、本年度も金光図書館の協力を得て、開催します。霊地在任の方はもちろん、どなたでもご参加頂けます。

また、本所設立七〇周年の記念行事を併せて開催すべく企画中です。

詳細は、金光新聞や金光教本部・本所ホームページなどを通じて、後日お知らせします。

○

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

また、例年、広く現代の問題関心との関連を深めながら、研究内容の充実を図るべく、一般諸学問や他の教宗派との研究交流を行ってまいります。

これらの取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりますと存じます。

◇令和六年度研究題目◇

〈第一部 教祖に関する研究〉

・幕末維新期岡山城下の金神祭祀集団について  
所員 白石淳平

・金光大神直筆帳面類にうかがう  
「振り返り」の諸相  
所員 堀江道広

〈第二部 教義に関する研究〉

・金光大神の戦争―平和論、救済論に向けて―  
所員 高橋昌之

・教祖とその家族について  
所員 塩飽 望

・差別を視点とした信心への問い  
所員 橋本雄二

〈第三部 教団史に関する研究〉

・「よい話をしていく運動」の発足とその周辺  
所員 山田光徳

・体制と人間―「教団布教」体制構想期の  
メディア展開に注目して―  
所員 須寄真治



★提

研究員

栗原 隆治郎

★言

## 本質を見る



私は大学時代に森林科学の分野の勉強をさせていただいたのですが、お世話になった恩師が「(研究が進んだ結果として) 森林のことはよくわからないということがわかったんです」と仰った言葉がとても心に残っています。最初に聞いたときには、他の同級生同様ポカーンとなって、何を言っているんだこの先生は、と思ったものです。しかし、学年が進み、学業も深まるにつれて、「確かに、森林のことはよくわからない」と恩師の言葉がじわじわと染み込んでいったのを覚えています。

同じ恩師の言葉としてもう一つ心に残っているのが、「物事の本質を見なければならぬ」というものです。何事も、その事柄の現れてくる根源には何があるのか、その事柄は私たちに何を伝えようとしているのか、そのところを深く考えていくことの大切さを教えていただきました。

研究とか研究所という響きには、どうしても「難しそうだ」というイメージを持ちやすいと思います。しかし、私たちは日常生活のありとあらゆる場面で、世界中で積み重ねられてきている様々な研究の成果にお世話になって生きています。同じように、金光教の事を学んだり信心を深めたりする過程において、おそらく知らない間に大変多くの教学研究の成果にお世話になっておられると思います。このことは忘れないようにしておきたいものです。

さて、世界中でも国内でも様々な悲しい問題が起こってきている現代において、宗教や信仰が社会に対してどのように貢献できるのか、逆に悪影響を及ぼすのか、見極めようとする厳しい目が注がれていると感じます。金光教の信心をしている私たちがどのような生き方をしているのか、が問われます。教内において比較的教外との関りが深い教学研究所には、金光教内部からの視点と外部からの視点とをバランスよく持っていたいただき、金光教の信心をしながら生きる私たちによき道しるべを示していただくとともに、金光教を知りたいという人々と金光教とのよき架け橋になっていただきたいと願うところです。

同時に、私たちもまた、教学研究所が積み重ねてきている多くの成果の恩恵を受け取りながら、金光教の信心の上で大切にしなければなら

ないことは何なのか、金光教の信奉者としてどのように人や社会に向き合っていくことが、金光教の信心を現し人や社会のお役に立つことになるのか、より深く考え行動し、正に教祖の信心の本質に迫っていけるようにならせていただきたいところです。

一人ひとりが今何をどう見ているのか、そのことを簡単に世界に発信できる時代です。そういう時代だからこそ、私たちはしっかりと物事の『本質を見る』ことが求められているのではないのでしょうか。これからも、教学研究所からの発信が、物事の本質を見る力を鍛える良き導き・刺激・エネルギーであってくださることを願っております。

(宮崎・都城教会)

本所ホームページは、金光教本部ホームページの移転に伴い、本年四月一〇日よりアドレス(URL)及びメールアドレスを下記の通り、変更させていただきましたので、お知らせいたします。

新URL

<https://kyogaku.konkokyo.jp>

新メールアドレス

[kyogaku.secretary@gmail.com](mailto:kyogaku.secretary@gmail.com)

# 追悼 渡辺順一先生

令和五年七月九日、本所元部長・囑託であられた渡辺順一先生が、御帰幽になられました。先生は、昭和五六年に助手、所員（昭和六一年）、幹事（平成三年）、部長（平成四年）を務められ、平成十一年に退任された後は、本所囑託として、六期二四年を満了されました。ここに、先生の御遺徳を偲び、諸先生方から頂戴いたしました稿を掲載させて頂きます。

ワタナベ！出て来い！！

岩本徳雄

「猪木！出て来い！！」  
彼と共に研究所時代を過ごした人はみんな、渡辺君と言えば、上半身はだかになって、胸を叩いて、「猪木！出て来い！！」と叫ぶ姿でしょう。今にして思うと、彼は、いつも、何かと、誰かと戦っていたのでしょうか。  
教団史研究を志す人にとっては、過去の出来事や人物を、疑問視したり、批判的に捉える姿



土佐屋旅館でくつろぐ渡辺順一先生（右）と岩本徳雄先生（左、令和元年）

勢・視座が欠かせない。  
宴会で人気を博した、彼のパフォーマンスには、そんな、歴史研究者の本性を感じさせられた。

彼は、退職後、大阪の教会で、初代の父親のあとを受けて、頑張っていた。  
一度、大祭の講師としてお招き頂いて、紹介された宮本要太郎君とは、ずっと、懇意にさせて頂いています。

それから、彼は、本部の活性化を願い、取り組んでいました。  
大阪の教会に居ながら、本部のことまでは、

なかなかできませんが、長年、御霊地に居たからでしょう。

因らずも、彼と小生は、同時期を、研究所と教会の御用にお使い頂いた訳です。

小生にとって、大事な同士の一人だと、心から感謝しています。

今、本教は、大きな転換点を迎えていると思います。この場を借りて私見を述べれば、教祖後の本教の歩みを、改めて振り返って、真に教祖が願われたお道であるか否か、見直して軌道修正をすべき時だと思ふ。

その際、教祖研究、教義研究に取り組んだ者としては、やはり、教団史研究者の知見を仰ぐ必要がある。

ただ単に、「教祖様は、こう仰ったから」とか「教祖様は、こうされていたから」ということを根拠にしてしまうと、いわゆる原理主義に陥ることになりかねない。

本教の歩みを、歴史研究で検証した成果をも

生かした改革が理想的でしょう。そういう意味で、今こそ、渡辺君に会って、意見を交わしたい。

しかし、残念ながら、もうできない。

頼む！夢にでもええから、出て来てほしい。

(岡山・乙島教会)

## 若者よ、体を鍛えておけ！

松澤光明



どう呼ぼうかと迷う。関西人同士、「お前なあ」と呼び合う仲である。学生会の頃から、懇親会となると、

二人でバカな出し物を披露してきた。しかし、今はせめて「あなた」と呼ばせて頂きます。

あなたが倒れて、意識不明の状態だと聞いたのは、今年の四月六日、本部大祭からの帰りの車中だった。以来、情報が得られそうな何人かと連絡をとり、励まし合いながら回復を祈った。日が経ち困難な状況にあることを聞くにつれ、もしも回復が叶わないなら、あなたのことが皆の記憶から薄れてしまう前に、神様に召し上げて頂く方がよい、とあらぬことを思うようになってきた。それほどに、あなたの残した功績は大きい。

その中身は他の人がこれでもかというほど示してくださるだろう。私の任はそこにはない。あなたもまた間違いないと思うているはずだ。

「若者よ、体を鍛えておけ！」。これは、研究所の助手時代、あなたがしばしば私に言った言葉である。空手チョップを自分の胸に交互に浴びせながら、得意げだ。そして、実際に二人で腕立て伏せをしたりしていた。一体何のために。研究所の飲み会に臨むに当たっての、ORブームだった。そしてあなたは宣言する。「まっちゃん、今日はワシ、初めから酔いにいくで。

お前は どうする」。冗談めかしてはいるが、嘘ではない。飲むほどに、助手思いの先輩方から、痛い指導の言葉が飛ぶ。多少なりとも抗いたかったのだ。二十代後半の頃である。お互い、酔っ払って「若気の至り」の枠を超えてしまったこともあった。

後年、懐かしく当時のことを語る機会が何度かあった。後輩の聴衆があれば、しめたものである。飲むほどに冴えわたるトーク。あなたは、私を「こいつはなあ」と悪者に仕立て、昔話を繰り出す。爆笑の渦だ。いつも腹の底から笑わせてもらった。思えば、教学研究所は、私にとって楽しい所ではなかった。その時代を大笑いさせてくれたのは、あなたの優しさだと感謝する。

私は、都合により終祭にお参りした。教内外から何百人という会葬者。斎場の全てのホール

を借り切ったの葬儀だった。あなたは、病やつれもなく堂々と寝ていた。私はあなたを誇らしく思いつつ、お棺を叩き、「体を労わらんか」と声をかけた。覚悟はしていたものの、とにかく淋しかった。もう一度では足りない。もう三度くらい、あなたと大笑いがしたかった。「そこかい」と突っ込まれても「そこや」である。

(三重・関教会)



第57回(平成30年)教学研究会(中央)

## 戦う人、敬愛する同志として

大榎美智子



渡辺先生に最後に会ったのはいつだったか。もう数年は経っているだろう。ご本部の光風館前でばったり会って、コーヒーを飲みながらしばらく話した。またいつでもご本部でばったり会うことができる、と再会を少しも疑わなかった。

渡辺先生との出会いは金光教学生会。その時も独特の風貌とにじみ出る変人感で、ずば抜けて印象深かった。その後私の方が遅くに学院を出て研究所に配属になり、同じ三部(教団史)で机を並べることとなった。私はほんの二、三年の研究所生活だったし、「教学」もよく分からない状態だったので、研究そのものより、休憩と言いつつ煮詰まると誰ともなくお茶を飲み始めて一人、二人と集まる雑談の輪や、何かにつけて酒を飲もうとしたり(もつとも私は飲めないのだが)、アホなことを言ったり言われたり、そんなことに時間を費やしていた思い出ばかりしかない。ただ頭の中にはいつもこんがらがった研究の断片が散らばっているの、それを忘れたいがためにおもしろいことを探していた毎

日だったような気もする。渡辺先生もやっぱり、常にふわふわとした笑い顔だった。そういえば先生は、はにかんだような、ちよつと困ったような、少し哀し気な笑顔だったなあ。いやいや、深みのあるように見せようとしていたのかも……だけど。

私が研究所を辞してから何十年、ほとんど会うことはなかったが、いろんなところで名前を見たり、聞いたりして、とにかく「ここにも居る、あつ、あそこにも居る……」という感じだった。神出鬼没、決してど真ん中にはいないけど、こんなところに……というようにどこかに居る。

金光教に渡辺先生という人がもういないのだ、という悲しく厳しい現実を受けとめるのは本当にしんどい。信心に、「戦う」という言葉はそぐわないような気もするが、どこまでも、どうかして前に進むことをやめないように、という意味で、「戦う」という空気の漂う先生の一人だったと思う。……なんてことを言うと、本気で嫌がられそうだが……。「金光教には渡辺さんが居る」と思えば何かしら安心できた。小さくまとまった自分にならないですむ気がした。

いつかまたばったり出会った時に、「みっちゃん、なかなかやるやないか」とでも言ってもらえるようでありたいと、そんなことを思っていたのだが。

(福岡・四ツ山教会)

## ご神徳の体現者としてのご一生

北林秀生



平成三年、研究生として捨てていただいた私の指導所員が順一先生でした。当時、先生は紀要論文

「日本植民地統治下での東アジア布教」の改稿のさなかだったこともあって、忙しそうにされていきました。入所した日、先生とこれからの方針について懇談したのですが、本当のところ、紀要論文をほとんど読んだこともなく、教学研究とは何であるのか全く理解もしておらず、取り組む課題なども皆目見当が付かない状態でした。しかし、話をしていく中で、「布教史をやってみるか? たぶん君に合つとる」とアドバイスしてくださり、布教史がどのようなことなのかも分からないまま、レポート作成に取り組むことになったことを思い出します。

研究生になって間もないころ、御用終わりの夕方にいつものようにお酒を酌み交わしていると、どんな音楽を聴いているのかという話になりました。私はその当時よく聴いていた日本ブルース界のパイオニア、憂歌団の名前を挙げた途端、先生が「うおおー」と叫び出しました。

思いもかけず同好の士に出会えた歓喜の叫びかと思つたのですが、全然違いました。

「あいつらに町じゅう追いかけて回されたことがあるんじゃない」

なんでそんなことになつたかというところ、一九七〇年前半、二十歳前後だった憂歌団のメンバー達に、高校生だった先生が説教したからだといふのです。たまり場になつていた阿倍野の喫茶店での彼らの言動を見るに見かねて注意したところ、怒りを買つてしつこく追い回されたそうです。「人生小僧ってあだ名付けられてな。大変やつた」との回顧を聞きながら、憂歌団は憂歌団で彼らの世界観そのままだし、先生も先生でそのままだなあと妙に納得してしまいました。

今にして思うと、そうした人々との出会いすら、先生が研究の中で出会つた個性豊かな人々との出会いと重なり合うような気がします。先生は教学研究の上で、布教史にとどまらず教祖、教団史など、さまざまな領域で成果を残されましたが、一番の関心事は、天地金乃神のお徳の体現者としての教祖、布教者、教政者だったのではないかと。そして、その視界には、町じゅう追っかけ回すような人々がいる社会ももちろん収められている。教学研究所を退いた後は、自らも神様のお徳の体現者であろうとしたのではないかと思ふのです。

そんなことは、お道の教師であれば誰でもそ

うだし、そうあるべきだといわれれば、そんなのかもしれない。しかし、順一先生は、そんなふうには語られるのでは物足りません。唯一無二の天地金乃神のお徳の体現者であろうとしたご一生だったと思えてなりません。

(青森・青森教会)

眼光鋭い狩猟民のような先生の  
笑みは、女子寮だけで見たわけ  
じゃなく…

所長 大林浩治



これから話す内容は、次のような注意書きを入れておきたいと思ひます。

この話は、現在ではあまりにも不適切です。かつてはこんな時代だったというところで、時代の変遷をも加味して渡辺先生を偲ぶ、というこの特集の趣旨をご理解の上、お読み下さい。

もう二十年以上も前のことです。研究所で飲んでいた渡辺先生は、突然、「女子寮に行こうや！」と叫びました。当時、若手だったボクは、

先生の呼びかけに、なんかウキウキしちゃって、「はい、行きましょう」と、素直に応じました。そして一緒に女子寮へ出かけたのです。到着すると、先生は、そこにいた研究所の職員を呼び出し、「他に誰かいるか。飲もう」。そう言つて、ドカドカと上がり込んでいきました。当然、ボクも一緒にしました。

先生は、ほんとすごいんです。呼び出した職員は、もう用済みとばかりに、「おまえは、なんているんや。外の公園の土管で寝てこい！」なんてことを平気で言うのです。女子寮に入る仲間役をさせておきながら、ひどい仕打ちです。だから、ここでひとまず、あのドラマのタイトルをお借りして言つておきましょう。「不適切にもほどがある！」。

さらに先生は、寮に入ってきたばかりの女の子が二階にいるのを、その職員から聞き出すと、急いで駆け上がりました。そのときです。酔っていたこともあつて、先生は、階段を踏み外し、下へ落ちてしまったのです。「大丈夫ですか？」とボク。「おう」と、階下から力強い返事です。

もう、忘れられません。再度上がつてくるときの、なんとも言えないニカツとした笑みを。それは、自分のぶざまな姿に向けたものじゃなく、「ほら、今、自分は禁断の地に足を踏み入れているんだよ」と、そんな境地から生じた、自己解放に浸る人間の笑みだったので。

あれ以来、ボクは、そのときのことを懐かしく思い出し、そのたびに、「むっちゃバカなことしたなあ」と吹き出したりするのですが、でも、それだけじゃない、あの笑みに、先生の教学研究に通じる何かを見る気がしています。

それというのも、暗闇に見た笑みには、メガネの奥から放たれたキラツとしたまなざしがあつたからです。きつとそれが、こんな思いにさせるのでしょうか。その鋭い眼光こそ、ボクが、教学研究でのいろんな場面で、先生に見てきたものだったのです。まさに狩猟民の眼光のように（女子寮で見たのが狩猟民の眼光だなんて、コンプラ的にヤバイよね）。

実際、先生は、論文を書いているとき、突然叫んだりします。「うおりゃあああああ！」。また、ゴリラのように、ドラミングを始めたたり（似合うんです、これが）。その後、しばらくして、鋭い眼光とともにあのニカツとした笑みが生まれているのです。

狩猟民の眼光と言いましたが、その眼光は、自分の身体が、言うべき言葉を仕留めた、そんな瞬間に生まれていたように思います。体の反応が、思念を凌駕する。それこそ教学研究ならではのよるこびであり、自己解放に通じていると思います。あ、そうか、その自己解放が、女子寮でも出ちゃったんですね。「自己解放にもほどがある！」

とまあ、こんなことが先生との思い出になっています。先生に直接お会いすることはなくなつたのですが、でも、こんなふうには先生の笑みは、ボクのなかに息づいています。いろんな意味でお育ていただき、ありがとうございます。

（兵庫・出石教会）

## 渡辺順一先生を偲ぶ

囑託 永岡由美

昨年七月九日に、金光教羽曳野教会教会長渡辺順一先生が急逝されました。先生と出会つたのは二〇一四年。短い間でしたが多大な影響を受け、父のように慕っていました。

二月に東京で友人とともに先生にお会いしたのが最後でしたが、先生の「よかつたなあ、幸せになつたんやなあ」という言葉がなぜだが強く心にのこりました。その後、五月に先生がお倒れになられ入院されたとききましたが、先生は意識を戻すことなく、そのままお別れとなりました。

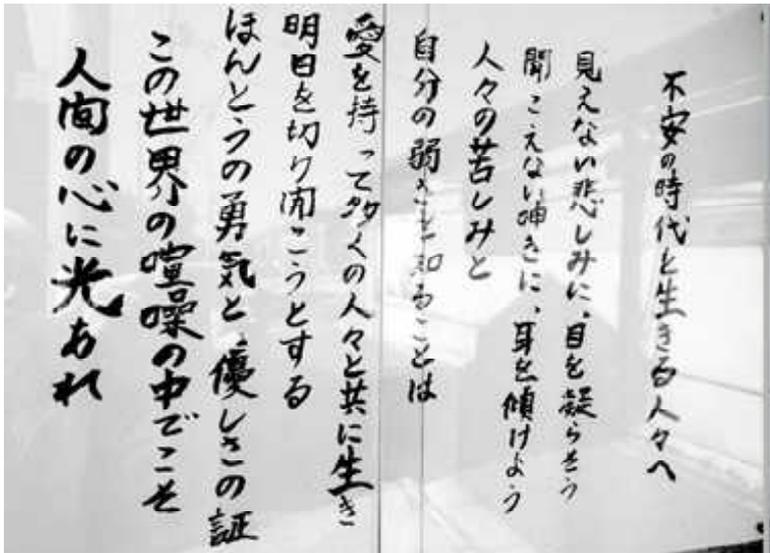
羽曳野教会は私の住まいから遠く、しょっちゅう参れるところではありませんでした。しかも、先生には「参るな」と言われました。どういう意味か考え込んでしまいました。

著書『神様の涙』（金光教徒社、二〇一二年）のなかで、渡辺先生は、「くぼい所」（明治六月一三日、『覚帳』）という金光様の言葉を、福嶋義次師の解釈を引きつつ以下のように述べています。

「福嶋氏が解釈するように、金光大神が描いた【くぼい所】（\*原文では記号）の図は、「狂いの世」を生きる人々の難儀が流れ込んでいた金光大神広前を、象徴的に表現するものであつたと思われまふ。そして同時に、その図は、書き手であり第一の読者でもある金光大神自身にとって、神との関わりで切り開かれた自らの立ち所を根本から問い、「神の広前」の所在を神の次元から問い続けてくるような、象徴表現でもあつたと思われまふ。（三六）」

くぼい所は難儀が流れ込むと同時に、またそれ故に、神の涙が溢れる場所、神と人との接点となりうると、先生は考えておられたのだと思います。難儀が流れ込むからこそ神が立ち現れる。神が立ち現れるのだから、うれしく、ありがたく、おもしろい。そうやって先生はいつも難儀の中にもおもしろいことを探しておられました。

くぼい所とはどこでしょうか。難儀が流れ込む場所です。不安の時代に、人の心には苦しみと弱さがとめどなく流れ込んでいきます。その苦しい心のなかに、神がすでに立ち現れている、すでにおもしろいことが始まっていると思えるなら、人の



羽曳野教会の掲示版(永岡由美氏撮影)

心がくぼい所であり、広前なのだ。先生はおっしゃりたかったのではないのでしょうか。  
先生が去られて七月で一年。それを思うと悲しくてあまりおもしろくは思えません。ただきつと、先生の不在をさみしく思う私たちの心にも、神様が働かれて、これから、うれしく、ありがたく、おもしろいことが起きてくる、今はそのように考えたいです。

(大阪・羽曳野教会)

## ニューフェイス

研究生

濱田 裕太郎

(山口・仙崎教会)

「平安時代とラーメン!!」、研究生面接の時に、大林先生が楽しそうにされていたのをよく覚えています。私は、学院入学前に七年間大学生をしており、日本史を勉強しながら夜はラーメン屋でアルバイトをして暮らしていました。そのことを話すと、「これは面白い人が来た!」と。

研究生になって少しして思うのは、「いやいや皆さんも十分面白いですよ!」ということ。実は昔、大学一年の頃に教会にあった紀要を読んでみようと、難しすぎて撃沈したことがあり、それから漠然と研究所に恐ろしい場所というイメージがあったのですが、実際は何と和気あいあいとした自由な場所。入所する前に持っていたお堅いイメージは、二週間ですつかり溶けてなくなりました。

学院で、一年間学びましたが、金光教をよく知ったことで却って、疑問に思うことが増えました。例えば「徳」とはどういうものか、辞書的な説明では「神徳は神様からの信用」と教えられるが、「神様からの信用」とは何なのか。「信用」があると何がどうなるのか……などなど、疑問から、次の疑問が生まれ、気が付くと堂々

巡りになっていることが多いのです。どうも自分分は、こういうことをぐるぐる考えることが好きなので。

歴史資料の本の山から探しものをする時のように、粘り腰で、チャーハン鍋を振るようにならなければ、問いと楽しく向かい合っていくべきです。



教学に関する交流集会(11月15日)

# 教団付置研究所懇話会

## 第二一回年次大会

教団付置研究所懇話会は、現代社会の諸問題に対して、宗教・宗派の垣根を越えて、宗教者である研究者が広く情報・意見を交換し、相互協力を進めることを目的として、平成一四年に発足。年一回、個別のテーマを設けた年次大会(研究会)の開催等の活動を継続してきている。

佐藤光俊元所長は同会の発起人の一人であり、本所は発足から同会の活動に参画してきた。令和五年度は、年次大会の当番研究所(輪番制)となり、一〇月三十一日、「社会の変化と信仰—いま、どこで、何が、どのように問われているか—」をテーマに、金光北ウイングやつなみホールにて開催した(参加者は、25研究機関、74名)。年次大会の主旨及び発表題目は次の通り。

### 【主旨】

近年、SDGsや信仰継承といった、現代社会における価値観や構造等の変化に関わって生じる諸問題を年次大会テーマとし、宗教の今後の在り方に向けて、議論が重ねられてきた。

この度の年次大会では、右のような個別具体的なテーマ設定をなさしめてきたような、問題を

を問題とする我々の意識の手前に目を向けてみたい。即ち、今を生きる宗教者であり研究者である個々が、社会との関わりの中で、どのように研究テーマと出合い、また、それぞれの信仰動機をめぐって何が問われているか。その共有が、我々の視界を開く刺激となり、また、宗教、信仰をめぐる自明の意識の問い直しへと通じて行くのではないか。

### 【発表題目】

- ① 須寄真治(金光教教学研究所)  
「資料を介しての歴史・社会・信仰との出合い」
- ② 葛西賢太(宗教情報センター)  
「聴かせていただく」を支える—上智大学での傾聴者養成の取り組みから—」
- ③ 宮地清彦(曹洞宗総合研究センター)  
「明治期曹洞宗の「慈善」から現代を考える—四大綱領及び『修証義』成立史を基礎として—」
- ④ 本上一博(玉光神社宗教心理学研究所)  
「旧・統一教会問題をめぐる討議で見えてきたもの」
- ⑤ 勝野隆広(天台宗総合研究センター)  
「「少子高齢化と寺院運営に関するアンケート」調査からみえてきたこと」

※教団付置研究所懇話会には、個別のテーマ

を議論する研究部会があり、発表③は、宗教と法律研究部会の、発表④は宗教間対話研究部会の代表者としての発表である。

○ 同年次大会に本所関係者として参加された、永岡由美氏に、『聖ヶ丘』発行に際して、ご感想の執筆をお願いした。

## 教団付置研究所と社会への責任

囑託 永岡由美



教団に付置される研究所には、無宗教の立場で「科学的」手法を謳う世俗の研究所にはない苦悩がある。信仰者でありかつ研究者である者は、その立場ゆえに、多方面への責任に引き裂かれながら思想を紡ぐ。その姿が、私には尊いと感じられてならない。

単純化しすぎることを恐れずに言えば、信心をもつ研究者には三つの責任がある。まずは己の信仰の母体となる教団に、そして、研究者として学界に、さらに教団と学界をとりまく社会に責任を負っているのである。今回のテーマ「社

会の変化と信仰——いま、どこで、何が、どのよう  
に問われているか——は、三つ目の社会への  
責任を意識させるが、いかなるテーマのもとで  
あつても、教団に所属する研究者は以上の三つ  
の責任から自由になることはないのである。

とはいえ、個人のレベルでは、その三つのう  
ちどれに重きが置かれるかは研究者によって異  
なる。自分のスタイルとしてすでにそれが確立  
されている研究者もあれば、若手研究者におい  
てはまだそのバランスを模索しているという場  
合もあるだろう。

一人目の登壇者となった、本教の須寄真治氏  
は、個人がグローバルな（そして希薄な）繋が  
りを持ちやすくなった今日、正義をめぐる理論  
が以前にもましてマジョリテイからの同調圧力  
になる危険性を指摘した。社会の動向に目を向  
け、社会が基準とする正義や倫理のあり方を意  
識することは求められるべきである。しかし、  
高い理念を追求することで、教団が基準に満た  
ない人々を断罪して切り捨てる機関になつてし  
まう危険性について、自身の史料との出会いを  
通して語った。続く宗教情報センターの葛西賢  
太氏は、公共空間において布教以外のかたちで  
宗教者が社会に益していく方法としての臨床宗  
教師の営みについて発表した。宗教者はとかく、  
語ることに重きを置きがちであるが、他者から  
学び、他者を尊重していくところに宗教の新し

い可能性を提示した。曹洞宗総合研究センター  
の宮地清彦氏は、歴史研究の手法で『修証義』  
の成立過程を紐解き、宗教における戒律と社会  
正義・倫理との関係を問うた。『修証義』は『正  
法眼蔵』を信徒向けに抜粋した書物だが、その  
編纂の中心となった大内青巒の「感じる微妙な  
ズレ・違和感、そして苦悩」を炙り出すことで、  
近代成立期の日本という怒涛の時代に宗門の正  
義・倫理がどこまで通用したのかという問題提  
起をした。天台宗総合研究センターの勝野隆広  
氏は天台宗が行った「少子高齢化と寺院運営に  
関するアンケート」の結果から、各教団に共通  
する寺院運営の困難さを確認した。

以上四者が提起した問題を具体的に体験した  
のが、教団付置研究所懇話会宗教間対話研究部  
会であつたといえるだろう。発表者である宗教  
間対話研究部会部長である玉光神社宗教心理  
学研究所所長本山一博氏は、宗教間対話研究部  
会で旧統一教会問題について論じることを提案  
した中心人物であつたが、なんとその会合は二〇  
二二年一月五日から二三年一〇月一〇日にい  
たるまで七回を重ねた。報道関係者も入れて議  
論し、当初は声明の発表も考慮されていた。し  
かし、議論を重ねるにつれ、その内容だけにな  
く、誰を発信主体として、誰に向けて発信する  
のか、その手続きなどが問題になってくる。ま  
た、メディアが付置懇から声明が発信されると

報じたことで、その責任の所在も問われること  
となつた。内容についても、宗教と世俗の倫理  
は同一ではないので、人権侵害という概念に即  
して一教団を糾弾するのは不当ではないかとい  
う意見がある。また、旧統一教会の例を他山  
の石として、自己反省をするべきだが、被害者  
救済法の成立に関しては議員やマスコミが宗教  
を理解していないという批判も出た。最後に本  
山氏は「世俗の論理で宗教を裁くのは異なる、  
世俗を納得させる超宗派的に妥当な宗教的論理  
が、宗教事件の問題に対して存在しうるのか」  
という問いを提示して発表を結んだ。

宗教間対話研究部会が体現したことからもわ  
かるように、宗教と社会の問題は簡単に論じら  
れるものではない。宗教の理念は社会通念とは  
別であるが、宗教の存在意義は社会への責任や  
貢献とかけ離れてあるものではない。改めて現  
代社会において宗教教団が何を提供していける  
のか参加者に問いかけた懇話会となつた。一方  
で、会合のあとの懇親会では、複数の他教団の  
参加者が、自分が過去に出会った金光教信者と  
の思い出を語り、それがいかに大切な出会いで  
あつたかを共有した。

教団と社会の問題は複雑である。だが、信仰  
に誠実に生きる人々は常に社会に影響を与え続  
けていることを改めて認識させられたのだつた。

# 令和五年度研究報告検討会 に参加して

## 資料に問われる経験

第二部所員 塩飽望



令和五年度は新助手を加えて研究報告が九本、業務報告が二本提出されました。毎年、整理のつかない頭と、

亀より遅い執筆速度で唸りながら提出日を迎える私ですが、自分とは異なる切り口で対象や課題に向かう取り組みを読み、自分の研究とも重ねながら検討に臨むこの期間は、貴重かつ楽しみでもあります。特にこのたびは、平成期までも射程とする取り組みが教団史研究において始まるうとするなど、これからの教学研究を構想するための足場を確かめていくような報告が見られ、大変刺激となりました。

そのなかで、現状本所に当該期の「資料がほぼない」ことが話題となりました。教団史研究に関わって、昭和末から現在に至るまで、どのような資料があるのか。あるとすればどれだけあり、それは収集可能なのか。そうしたことを

確認し、資料の収集に向けた動きをつけていく必要性について話し合われたのです。これからの教団史研究にとって、重要な課題といえます。

他方、「資料がある」という圧倒的な環境を意識させられたのが教祖研究です。平成二十七年度の資料提供により新たな教祖直筆帳面等との出会いを経て九年が経ち、主な帳面類については教内への開示も進められてきました。ですが、ここで「資料がある」とは数のことを指しません。

「金光大神御覚書」や「お知らせ事覚帳」(以下、「覚帳」)から教祖像や信心観が汲み出され、築かれ、またそのことによつて都度資料への見方が問い直される。教祖研究は、これまでの資料の見方との格闘を続けているのだと、改めて気付かされたのです。

ここで紹介したいのが、堀江道広報告「金光大神における「さしむけ」の様相―「金乃神様金子御さしむけ覚帳」における金銭融通に注目して―」です。本報告は、「覚帳」に見られる「明治一二年己卯六月二十七日、帳面見て考えてみ」との記述で始まる貼紙(「覚帳」22―21、22)中の「帳面」には、「金乃神様金子御さしむけ覚帳」(以下、「金子覚帳」)も含まれるのではないかとその着想から始まります。そして、「金子覚帳」の金銭融通の記事を主な手がかりとして、金光大神が振り返ることとなったのは如何なる出来事であったか、またその出来事を振り返り貼紙

をする金光大神のありように浮かぶ「さしむけ」の様相について考察を試みています。

具体的には、万延元々慶応二年における五流尊瀧院及び修験者との関係、そして白川家門下の神社神職となるまでの過程と、元治元々明治六年における安部家との金銭授受の様子を窺ったのち、貼紙を記すに至る明治一二年までの金光大神の状況を概観しています。それにより、「金子覚帳」を読み返した金光大神において、明治一一年五月に萩雄が賀茂神社の祠掌職を申し付けられたこと、そして九月に安部家の娘喜代を宅吉の妻として迎えたことの意味が、かつて行われた金銭融通を通して確かめられる様相を浮かべさせています。この様相は、読み手である私たちに、過去を振り返ることとの関係から「さしむけ」とは何かを考えさせるものとなりました。

この作用に関係して印象深かったのは、検討会中の筆者の発言です。それは、筆者が「金子覚帳」に向かうなかで、「さしむけ」それ自体の意味を求めることから「だんだんと関心が外れていき、次第に金光大神が「さしむけ」を感受するその様子の方をわからされていった、という意のものです。

ここには、資料は「そのようにある」という圧倒的事実を有しても、同時にそこに示された内容をそのまま答えにはさせず、私たちに問い

を向けてくるものなんだ、ということをおぼろげに思われます。だからこそ筆者は、「金子覚帳」の記述に「さしむけ」そのものの意味を求めるような見方を外されていったのではないのでしょうか。そうして見えてきた、帳面類を介して自身の思考を超えたものに出会う金光大神の姿は、「他ならぬ金光大神が記した」という、これまた圧倒的事実に付き纏ってきた私たちの見方自体を問うものではないでしょうか。

このことは、私の取り組み（「教祖とその家族」への眼差し―教祖伝記を手がかりとして―）にとっても示唆深いものとなりました。このたびの取り組みで私は、昭和二八年及び平成一五年に刊行された『金光大神』を対象に、「教祖とその家族」がいかに表象されてきたかを窺いしました。そこには、とせ、金吉、萩雄などが眼差した「教祖とその家族」のありようへの関心があるからです。みていくと『金光大神』では、「教祖」を神の意思や信心の何たるかを知る存在と見做したうえで、家族は読者にそうした「教祖」への理解を促したり、関心を惹きつけたりさせるものとなっています。

しかし、そうした表現のもとともなっている言行資料へ目を向けると、また違ったありようが浮かんできます。それは、ままたまらなさのなかで感情を高ぶらせたり、家族に対して少しジメジメした調子の言葉を向ける当人の姿です。

これが何とも、自分の父親を見ているような、えもいわれぬ親しみを感じさせるのです。教祖伝記に窺ったありうべき心理理解の表象の「型」と、言行資料に浮かぶ様相との間には落差があつて当然でしょうが、しかし、それとともに、そこにある「家族」という関係性のリアルは、もう一度心理理解の「型」がはらむズレの意味を考えさせるものではないでしょうか。私は、そこに信心を介した如何なる経験が浮かぶのかを求めたいと思います。

だからこそ、言行資料に対しても、そのまま答えにしておく考えを巡らせるような向き合い方をしないよう、気を付けなくてはと思います。言行資料に真実があるのではなく、その落差にこそ考えるべきことが浮かぶのであり、そのようにここからの資料への向き合いを大切にしていきたいと思えます。

（岡山・本部在籍）

## 徒然なるまま

ひと時間も抱え込んで

評議員 阪井澄雄



平成二十一年、立教百五十年を迎え、前年夏に着工した本部広前祭場の耐震補強工事が竣工し、並

行して建設が進められた北ウイングも会場となつて、立教百五十年教会長信行会が五月から七月にかけて六回に分けて開催されました。終盤の信行会の休憩時間に教務総長から電話があり、「教団会の正副議長、正副主査の先生がたが来られているので同席するように」とのことでした。

総長室に入りますと、「さっそくだけれど：」と、懸案であつた祭場本体の耐震補強が実現してきた安堵と共に、「この機に祭場屋根天井の耐震補強も進めてもらえたらと思うがどうだろうか」というお話でした。この時まで数年間、経費の問題で耐震検査自体が手付かずであつたのが、旧金光会館の耐震強度不足が急浮上し、間近な立教百五十年を目標としての取り組みが始まり、教主金光様の御取次・御祈念のもと全教の思いが結集して万事におかげを蒙り、いよいよ十月、十一月に節年の御祭事をお迎えする態勢に入ろうかという頃でしたから、当局としては予想もしていなかつた懇談となりました。

詳細な検討や資料があるわけではなく、おそらく直近の耐震工事にかかわる事態の推移と教

師・信奉者の動向や空気から、教団会議員の皆さん各人が身近に、「祭場の屋根天井耐震補強におかげを蒙るのは今だ」と感じ取られたのでしよう。三代教主金光様の御晩年に竣工し、立教百年の大祭をお仕えした祭場が五〇年を迎えるという回り合わせでもありました。

教団会は、昭和五五年の制度改正の内容である「助言と協賛」という基本姿勢を踏まえて「大切な御用を進めてこられ、そうした流れで」この機に祭場屋根天井の耐震補強も進めて」との声は、当局に一息つく暇を与えない酷なものでしたが、祭場内の足場を移設しながら工事を進めて経費を抑える工夫もなされ、議を経て着工できたのも、今から振り返って「あの時だから出来たのだな」と思わせられます。

当時、佐藤総長が教団会で、この件について助言と協賛の所産と位置付けて発言を試みたのですが、議員の方々は難色を示されました。申し入れが通ったか否かの構図より、以心伝心的了解を「諒」とする意識が高いのかと私的には感じたことでした。「助言と協賛」の言葉で括つても、立案・執行と審議とをどう具体化できるのか。その関係性の理解様式やニュアンスなど、差異の幅はかなりあるかもしれません。また、意見や提案を寄せることと、結果に対する責任とはあくまでも別物です。それらを教主統理の中味としてお抱え下さる金光様の御取次・御祈

念の中で一つ一つおかげを蒙って来ています。

この時に、もう一つ要請があつて、それは教団会議員総会の総意として、金之神社の解体整備について年内(立教百五十年中)に決着をつけてほしい、というものでした。この件は財的な処理は済んでいながら、当事者の御存命中は解体しない、という覚書によつて残された建物が、十年余を経て老朽化により危険な状態になつてきたという問題です。

その覚書が交わされた根っこには、金之神社の歴史についての認識の不一致、信仰対象として払われるべき敬意や、覚書そのものに対する誠意への疑義とでもいうものが感じられ、当局としては、そこを和らげるべく、数年間ゆくりと交渉を重ねて、臍げに好感触は得ていました。しかし七月から年内になると、「相手方もあることで、頑張つてみます」としか答えようがありませんでした。

八月の末から現在のモニユメントの外観、そこに打刻する図、説明文の案や日程・段取り、その他を提示しながら、解体整備を目標に据えた交渉を開始。教主室会議にもお諮りしながら交渉を経た内容のまとめを教主金光様にお届けしたのが十月一日の朝。四日から立教百五十年生神金光大神大祭が始まり、記憶ではその第一日だったと思います。御祭事が終了し、会堂へ戻られる金光様をお見送りする際、公用車が目

の前を通り過ぎた途端に胸ポケットの携帯電話が鳴りました。解体整備計画を最終的に承諾する旨の電話でした。その瞬間に、「ああ、このお年柄の一連の動きは、歴代金光様の絶え間ない日夜の御祈念あつてのことなんだ」と、頭の中が隅々まで照らされたような温かい心持は今も鮮明です。いま書いてみて、制度の諸要素が機能して、合意や了解が生まれて結果する間の、ある意味ダイナミックな「時間」というのは、どこにどう紡がれているんだろうか、と頭をよぎります。(大阪・東壱教会)

「申し渡しの覚」(金光大神直筆資料)が、国立歴史民俗博物館で展示される運びとなり、レプリカ作成のため、樋浦郷子氏(同館学芸員)が来所されました。



「申し渡しの覚」の採寸

# 彙報

(令和五年六月一日  
〜令和六年五月三十一日)

## ▲ 人事関係 ▼

### 一、職員

○教師森定展開、一〇月一日付で助手に任命。  
○所員森川育子、一二月三十一日付で辞任。○書記安武格、三月一〇日付で主事に任命。○所員岩崎繁之、三月二七日付で辞任。○部長高橋昌之、三月三十一日付で第一部長の兼務を解く。翌四月一日付で第二部長に指名。○部長白石淳平、三月三十一日付で第三部長の指名を解く。翌四月一日付で第一部長に指名。○幹事山田光徳、三月三十一日付で辞任、翌四月一日付で部長に任命。第三部長に指名。○所員須寄真治、四月一日付で幹事に任命。助手橋本雄二、四月一日付で所員に任命。

### 二、研究生

令和五年度  
○教師森定展開、九月三〇日付で委嘱期間満了。  
令和六年度

○教徒濱田祐太郎、五月一日付で研究生を委嘱。  
三、嘱託

○嘱託渡辺順一、六月三〇日で委嘱期間満了。  
○信徒永岡由美、一月二〇日付で嘱託を委嘱。

### 四、研究員

○研究員松岡光一、九月三〇日で委嘱期間満了。  
○教師熊谷元喜、一〇月一日付で研究員を委嘱。  
○研究員西村明正、同服部貴子、一月一九日で委嘱期間満了、翌二月二〇日付で再度委嘱。  
五、評議員

○評議員水野照雄、二月一九日付で任期満了、翌二月二〇日付で再任。

※五月三十一日現在

所長、部長三名、幹事、所員三名、助手一名、事務長、主事三名、研究生一名(計一四名)、嘱託六名、研究員八名、評議員五名。



研究生入所式(前列中央、濱田祐太郎研究生)

## SAKAMICHI

今年も通信『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。所外から玉稿をお寄せ頂きました先生方には、厚く御礼申し上げます。

今号は、昨年夏お隠れになった渡辺順一先生への追悼記事を掲載させて頂きました。

先生が助手時代、研究課題が容易に捉まえられない悔しさの中で、先輩達から聞かせて頂いた励ましの言葉は、「倒れてもファイティングポーズは取っておけ」、「最後は根性だ」、であったそうです。

また、先生は、本紙への寄稿の中で「教学が向き合うべき状況とは、単に教団や日本の状況とは限らないだろう。時代は、世界史の転換期を迎えている。この世界の激動の時代にこそ、教学はラディカルに教祖に帰ろう。世界との関わりで教祖が見据えた、人間存在の深淵の暗闇と光を。現代に問おう。日々、技(方法)を研きつつ」と述べておられます。今に響く教学研究への力強いエールです。<sup>(7)</sup>

発行・印刷 金光教学研究 所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話(〇八六五) 四二―三一一七

FAX(〇八六五) 四二―三一一九

URL―<https://kyogaku.konkoko.jp>